
L a s t M e s s a g e

凜羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Message

【Nコード】

N1101I

【作者名】

凜羅

【あらすじ】

人の世を終えて・・・それでも伝えたいことがあるそれは愛の告白なのか恨み言なのかは分からないでも・・・その声は誰にも届かないだからこそ私は伝えたいその人が最後に何を思ったのか・・・その人の最後の言葉・・・Last Messageを

「あなたなんか大っ嫌い！」

それが私があなたに言った

最後の言葉だった

都内にある何の変哲もない和風の二戸建ての家

そこには2人の男女が住んでいた

誤解を生まないためにもあらかじめ言っておくが恋人同士ではない

男の名は天野 涼

年は17歳で高校2年生だ

女の名は如月 藍

こちらも17歳の高校2年生だ

どうしてこの2人が一緒に住んでいるかという

話せば長いが簡単に言うと住む家が無いからだ

天野は火事で家と両親を亡くした

如月は両親の借金で家を失くした

その両親は彼女を置いて現在行方不明だ

彼女は母方の姓を名乗っているので追われる心配はない

そんな2人がたまたま会ったのが始まり

特に不満も無かったので格安のこの家に住むことにしたのだ

ちなみにお互いは別々の学校に通っているので冷やかしを受ける心

配もない

しかしこの2人、両親を亡くした以外にも共通点があった

それは

霊が見えるということ

2人にとって霊は怖いものではない
ただ実体が無いというだけの存在だ

そんな彼らのもとには今一人の女性が訪ねていた
長い黒髪を後ろに流し、白い肌は透き通るように白く、大きな瞳が
印象的だった

だが体が周りより透けている
つまり彼女は霊だ

「あの・・・俺たちに頼みたいことがあるって・・・」
そう聞いたのは短い髪をはねるようにカットした少年

天野 涼だ

顔立ちは鼻筋が通っていて目は生き生きと輝いているのだが
今は眠そうな目をしている

“・・・実は・・・私会いたい人がいるんです”

そう言った彼女の名は瀬川 奈津美、22歳
先月交通事故で死んだのだが、彼らが霊が見えると分かりここに来
たのだ

彼女は死ぬ前に彼氏とケンカしてしまったのが気がかりでこの世に
残ってしまったのだ

“私は彼に・・・嫌いと言って死んだのです・・・”

「それで彼氏に謝りたいと？」

そう言ったのは長い茶色の髪をゆるく巻き
大きな目の色も茶色で鼻立ちもくっきりとした少女、如月 藍だ
こうして2人が並んでいると美男美女のカップルに見える
「だったらさっさと行って謝ればいいじゃないんすか？」

その時バキッという音がした

藍が涼を殴ったのは言うまでもない

「あんたバカ？彼氏は霊が見えないからこうして来てるんじゃないか！」

「あっ・・・そうか」

「まったく・・・」

そんな2人を見て瀬川はクスクス笑っている

“お2人は本当に仲がいいですね”

「よくないです！！」

こうしてハモツてしまうところが仲がいいと言われる原因なのだが・

2人は自覚が無いようだ

ハモツてしまうのが気に入らない涼がムスツとしているので
藍が仕方なく

「それで・・・その彼氏は今どこに？」

“この近くにいると思います。引越していなければですが・・・”
それはそうだ

とりあえず今日は土曜日なので2人はヒマだ

クラブもバイトもしていない彼らは休日はヒマなのだ

では何故2人は生活できているのだろうか？

実は2人とも各々の高校で特待生なのだ

だから彼らの授業料は免除されている

それに彼らの境遇を案じて学校側からある程度の援助を受けている
なので彼らは生活できているのだ

「とりあえずあなたの彼氏のところへ行きましょうか？」

彼女が住んでいたのは意外にも近所だった

彼女に案内してもらい辿り着いたのは普通のアパートだった

“ここに来るのは・・・久々だわ・・・”

彼女が住んでいた部屋の表札の名は

瀬川・瀧本

この瀧本というのが彼氏だろう

さてどうしたものと藍が悩んでいると・・・
ピンポン

涼がチャームを押していた

「ちよっ・・・何勝手に押してんのよ!？」

「じれったいんだよ。さっさと済ましちまおうぜ」

すると一人の男性が出てきた

浅黒く焼けた肌に鼻筋の通った爽やかな印象の青年だ

「瀧本さんですか？」

「そうですけど・・・」

いきなり現れた2人の男女に不信を抱いているようだ

しかし早く瀧川さんの意思を伝えなければならぬ

霊は長時間現世にいることはあまり良いことではないのだ

「実は私たち瀧川さんの知り合いなんです」

「奈津美の・・・？」

「とりあえず俺たちを中に入れてくんねえか？」

まだ少し疑っているようだがとりあえず中に入れてくれた

“あの頃と何も変わってない・・・”

瀧川は嬉しそうだった

「奈津美の知り合いって聞いたけど・・・」

そう言つて2人にお茶をだしてくれた

「あの・・・こんなこと言っても信じないと思いますが、私たちが霊が見えるんです」

「なっ・・・!」

いきなり突拍子もないことを言った藍に瀧本は驚きを隠せないでいた

「大人をからかわないでもらえるか・・・!」

「本当なんだ。あんた先月瀧川さんとケンカしてそのまま彼女は交通事故に会った。あの日は彼女の誕生日だった。なのにあんたは約束の公園へ行かなかつた。違うか？」

「ど・・・どうしてそれを・・・」

「彼女に聞いたんです」

2人しか知らない事情を知っているのだ
やっとな瀧本は信じた

「彼女はそれが未練としてこの世に残っちまった」

「奈津美がそこに・・・」

瀬川が悲しそうに彼を見ている

自分が彼の目に映れないことが悔しいのだろう

「瀬川さん。私の体使いますか？」

“えっ!?”

「如月!?’

如月は霊を憑依させられる

彼女自身の口から言ったほうが早いと踏んだのだろう

瀬川が少し迷ったが藍のしつかりとした目を見て決心したようだ

藍の体にすつと入っていった

「聖・・・」

「奈・・・奈津美・・・」

声は藍だがその名前は瀬川しか知らない名前だ

「あの日・・・どうして来なかったの？電話も繋がらなかった・・・」

「

「違うんだ、奈津美！あの日本当は向かうつもりだったんだ」

瀧本は車で彼女が待つ公園へ向かっていた

しかし彼が走っている道路で交通事故が起きていた

その処理が手こずってしまい予定より大幅に遅れてしまった

しかも携帯は警察がいたため運転しながら電話はできなかったのだ

やっとな瀧本は信じた

そしてすぐ傍では交通事故が起こっていた

「・・・」

「ごめん・・・あの時警察に見つかってでもメールか何かするべき
だった」

「・・・そんなことあなたができるわけがないでしょ？」

「ごめん・・・本当にごめん・・・」

「私の方こそ大嫌いなんで言ってる・・・」

結局思いがすれ違っていただけだったのだ

「聖・・・本当は大好き・・・ずっとずっと」

「俺もだよ・・・奈津美」

瀧本がそう言った途端、藍の体から瀬川が出てきた
未練が無くなったのだ

彼女は光が射す方へと消えていった・・・

「瀧本さん・・・」

もう藍に戻っていた

「ありがとう・・・最後に彼女に会わせてくれて」

2人は嬉しかった

自分たちの能力がこんな風に誰かを救えることができている・・・
彼女の最後の言葉を伝えることができている・・・

これからもできる限り伝えていこう

Last Messageを・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1101i/>

Last Message

2010年10月10日03時12分発行